

ノラ

「ぐす……ぐす……ひっく。

あー……ちくしょう、こんな泣かしやがってよ……ちえっ！」

暫し貴方の胸を濡らし、泣き止んだノラ。

スネたように文句を言うが、その顔は何処か嬉しげなものであった。

その様子に、貴方も擦ったい（くすぐったい）ような気持ちになり、

【気になる女にこれだけ思いをぶつけて貰えるなんて、男冥利に尽きるな】

などと、つい軽口を叩いてしまう。

ノラ

「ばっ……何言ってやがんだよ、まったく！

……それ、誰にでも言ってるんじゃないだろうな？

そーいやおっさん……そーだよな。

あの娼婦とも随分仲良さそうだったもんな……え？」

ノラは軽口に文句を言おうとしたが、ふと……その目がいぶかしむように細められた。

どうやら下手な軽口のせいで、彼女に余計な疑いを抱かせてしまったらしい。

慌てて、そんな事はないと機嫌を取ろうとするも、少女の顔から陰しさは取れない。

ノラ

「どーだかなあ……その慌てぶりが怪しいっていうかさ。

……実際どうなんだよ？

娼婦とあれだけ親しげにしてて、ただ……友達として仲が良いだけなんてこたあ、ないんだろ？」

ノラが貴方の胸元から見上げるようにじっと瞳を見つめてくる。

怒っているという程ではないのかもしれないが、その細められた目が妙に怖い。

貴方は思わず言葉に詰まるが………どういう所か知っている彼女に誤魔化しても仕方の無い事である。

渋々といった様子で頷くと、少女の顔が余計に陰しくなっていた。

ノラ

「ふーん……あ、っそ。

……まあ、別におっさんは”大人“の男だし？

そーいう遊びをしてても別に不思議はないけどさあ………ふーん？」

ノラ

「………どういう事すんだよ、ああいう……娼婦と遊ぶ時ってのはよ」

不機嫌になったノラが、じととした目をしながら貴方に問いかける。

幾らなんでもそれは言い難いと貴方がたじろぐと、少女が腕を伸ばし、貴方の胸元を掴みぐいと自分に近づけた。

《ぎゅっ！》

(引き寄せる音)

ノラ

「何だよ……ついさっき、惚れた女って言った相手に対して隠し事かよ？

……どうなんだ、色々、スんだろ？

キスとか、他にも……その、大人の……そういう、奴をよ」

先ほどの涙の名残で潤んだ少女の瞳を間近で見せられながら、すぐこまれる貴方。

惚れた弱みというべきなのか、力であればすぐに振り解けるはずの彼女の拘束が、やけに強く感じられて逃げられそうにない。

どんな羞恥プレイなのかという思いを抱きながらも貴方は、

【それは……そういう場所、だからな】

と、言葉を濁しながら彼女の言葉を仕方なく認めるしかなかった。

ノラ

「むっ！ ……ふーん、そっか、そっか……ふーん？

まあ……まあまあ、別に、いいけどさ！

オレは、そういうの気にしないし……ふんっ！

……そういや、おっさんって最初の頃もオレに、奉仕しろみたいな事言ってたもんな？

……おっさんってやっぱエッチっていうかよ、おっさんらしいっていうかよ、ドスケベっていうかよ！！

ふーん……ふーんだっ！」

貴方の胸元を掴みながら、ノラが唸るように不満を告げる。

何をどう言っても、今の状況では彼女の機嫌が収まりそうにないのを察した貴方は、頭が痛くなるのを感じながらどうしたものかと悩んでいると……ふいに。

ノラ

「……なあ、おっさん。

……キス、してくれよ」

突然少女がそう言ってくる。

何を急に言い出すのかと驚く貴方の目の前で、少女は顔を赤くしながら言葉を続けた。

ノラ

「娼婦にしてて……オレに出来ねえってこたあねえだろ！

オレだって、女……なんだし？

そういう、キスぐらい……もっと先の事も、やれねえとは、言わせねえぞ？」

《ぎゅっ》

（力を込め、より顔を近づける音）

ノラがそう言い、より一層顔を近づけようとする。

まだ若々しく、瑞々しく張りのある唇が近付いてくるのを感じながら、
貴方は慌てて彼女を制止する。

【いきなり何を言ってるんだ！ 何も無理をする必要はないだろ？】
つと。

ノラ

「うっ……」。

ん、んな事は分かってるよ！！ でも、でも……オレは、……おっさんと、キスしたい。

だって、ヤダもん！ 娼婦にそういう事出来るのに、オレには出来ない
なんて事……オレ、絶対ヤダ！」

ノラ

「だから、シて……欲しい。

オレ、負けたくない……女として、おっさんの相手を出来るって、証明
したい。

だって、だって……おっさんがオレの事好きって言うてくれて、オレだ
って……同じ思いで！

それなのに出来ないからって思われて、そういう吐き出したいものは別
の女の所に……なんて思ったら、耐えられないもんっ！

そりゃ怖いし、緊張してるし、なんか……どうしようもなく頭がぐるぐ
るする思いはあるけど！

でも、おっさんの相手を出来るって証明出来ない方が、ずっとヤダ！」

ノラの顔が、くしやりと歪む。

それは、彼女の不安の表れだったのかもしれない。

母親に裏切られ、父親に売られ、娼婦として男に抱かれる日々を過ごすしかないと覚悟していた少女が持った、たった一人抱きしめてくれた貴方まで失いたくないという不安。

ここで、彼女にキスをし、抱いてしまうというのは簡単なことだ。

だが、本当にそれでいいのだろうか？

勢いに任せてしまっっては、かえって後々彼女を傷つける結果になるのではないだろうか？

そんな心配をし、動くに動けなくなってしまった貴方に、

《ぎゅっ！》

（再び、力を込める音）

ノラ

「……………っ！ んっ、ちゅっ！！」

焦れたようにノラが、強く力を込め貴方の頭を下げさせると……………彼女の唇と貴方の唇が、重なった。

ノラ

「んっ！？ ったあ……………」

うつ、なんだよ……キスって、痛いんだな。
皆、こんなものありがたがってしてんのかよ……」

キスというには勢いが強すぎ、当たった唇から骨を通してごつんという衝撃が伝わってくる。

思っていた通りのものではなかったためか、ノラは痛そうに目を細め、唇を尖らせた。

【こんなものがキスの訳あるか、バカ】

と、貴方は彼女の唐突の行動を嗜めるように怒る。

……その中に、少しでも彼女の行動に対してどきりとした思いが混ざっていなかったと言え、嘘になるかもしれないが。

ノラ

「う、うるせえなあ……知らないんだから、仕方ないだろ！

……そんなに言うなら教えてくれよ、おっさんが……ちゃんとしたキス、ってのをよ。

じゃないと、オレ……ずっとこれを、キスって事にするからな！」

貴方の言葉に不貞腐れたようにノラが頬を膨らませる。

放っておけば、間違いなく彼女はずっとこれをムキになって続けるのは、想像に難くなかった。

どうにも彼女に振り回されてしまっているのを感じてはいるものの。

それでも……ここまで彼女が思いを固めているのなら、彼女がそこまで

不安なのならば、応えるべきなのかもしれないと、貴方は心を決めた。

【優しくするし、出来る限り痛くないようにもするが……絶対なんて約束出来ないからな？】

と、貴方は彼女に確かめるように、彼女に囁いた。

ノラ

「あ……。

……ん、うん……それでいい。

へへ♪ うん……それでいいよ。

オレ……あたし、おっさんになら、少しくらい痛くつても……ちゃんとシて貰えてるんだって思えて、嬉しくなれるもん」

ノラは貴方の……ある意味、敗北宣言でもある言葉を聞くと、嬉しそうに頬を緩ませた。

瞳に先ほどまではとは別の、潤んだ色を浮かべながら、手折られると言われているのにそれが幸せというように……華やかに笑みを浮かべる。

ノラ

「……シて、下さい。

あたしに、貴方が……傍にいるって、思わせて下さい。

貴方が傍にいてくれて、すごい幸せだって、あたしも……いっぱい、いっぱい、頑張って……応えますから。

応えさせて……下さい」

男勝りに荒っぽい口調をしていた彼女が、幸せそうに言葉を紡ぐ。

その変化に、驚きながらも、貴方も覚悟を決め……今度は貴方から彼女に顔を寄せる。

そして……。

ノラ

「ちゅっ……ん、あ……♪

……へへ♪ 今度は痛くないや♪

柔らかくて、暖かい……へへ♪

……おっさん、ね？ もう一回……キスして？」

唇を触れ合わせるだけの、子供同士のようなキス。

けれど、それは不思議な程胸の中が暖くなるようで、彼女もまた同じようであった。

ノラの可愛らしいおねだりに頷いて応えながら、貴方は彼女の腰を抱き、そのままゆっくりとベッドへ運ぶ。

《しゅる……どさっ》

(ベッドに運ぶ音)

ノラ

「んっ、あ……おっさ、ちゅっ♪ (※ここでベッドに寝かされる)

ちゅっ、ちゅっ……んっ♪

……ふ、へへ♪ 優しく……食べてくれよ？

「♪つつちゅちゅ、ん……ん」